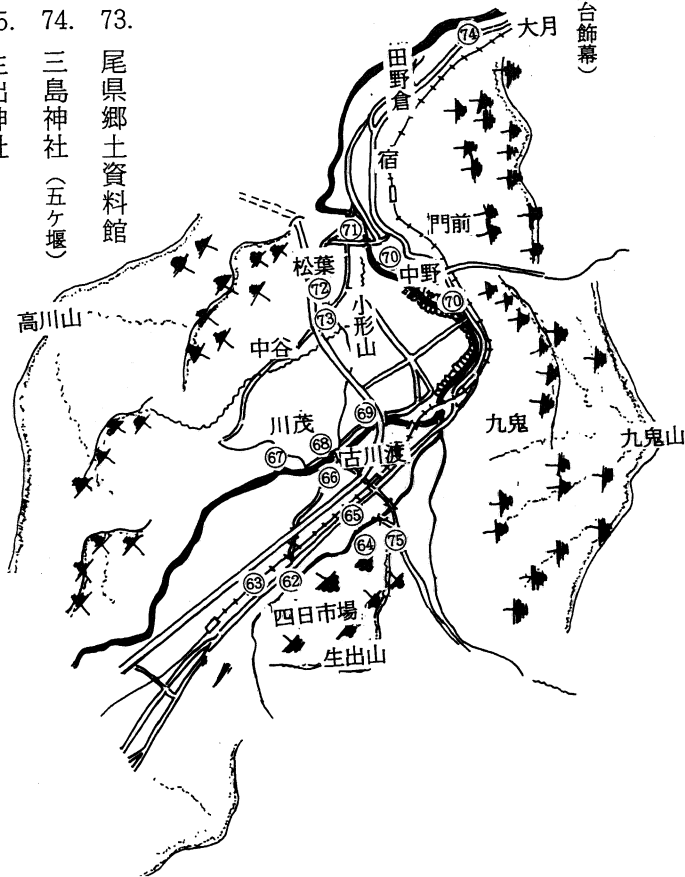


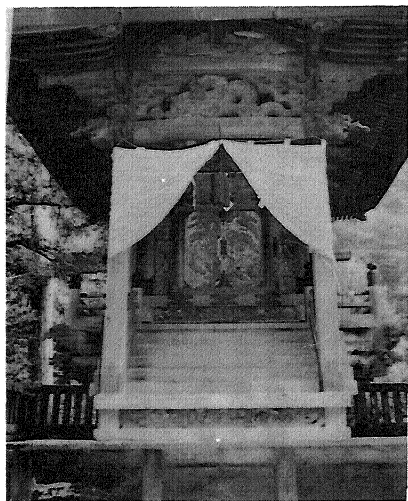
# 禾生地区

- 62. 生出神社 (八朔祭と屋台飾幕)
- 63. 保寿院 (アツツ観音)
- 64. 清泉院
- 65. 東陽院
- 66. 八王子神社
- 67. 浄泉寺
- 68. 西光寺
- 69. 二ヶ堰
- 70. 法福寺 (お経塚)
- 71. 富春寺 (金山観音)
- 72. 稲村神社
- 73. 尾県郷土資料館
- 74. 三島神社 (五ヶ堰)
- 75. 生出神社



## 62. 生出神社 (四日市場)

祭神は、建御名方命、八坂刀売命で、例祭は九月一日、谷村の八朔祭として盛大に行なわれている。本殿は、明和五年(一七六八)に再建されたもので、柱を除いて全面に彫刻され、雄大壮嚴なものである。社殿裏側の獅子の彫刻の裏には、「獅子は子が三歳になると深い谷底へ突き落とし、あとは自力で一人前になれ」という諭しが刻まれていると伝えられている。



生出神社社殿

本殿の彫刻師は、江戸の後藤茂吉衛門、後藤市蔵、野川の高田勝蔵と棟札にある。

伝説によると、奈良時代大宝三年(七〇三)、生出山の頂きに毎夜光りを放つものがあるので、村人がその光をたずねたところ、一個の岩にたどりついた。その岩は表と裏に登龍の形があるので不思議に思い周囲を眺めていると、突然そこに異様な老人が現われ、「この岩を神宝として諏訪大神を祀れば必ず里人は安泰に守護されるだろう」と告げ、その姿は消えてしまった。村人たちはそのお告げによって、山の頂きの池のそばに社殿を造営し、その名を諏訪大明神とした。

その後、延長七年(九二九)に現在地に宮を移し、山頂の社を奥宮とした。応永二三年(一四一六)に武田信満が駿河に出陣するとき、諏訪大明神に参拝し、社領を寄進して武運長久を祈った。元和六年(一六二〇)には領主鳥居成次が社殿の造営を行ない、明和五年(一七六八)七月に本殿が再建され、近くに地名のおこりとなった市神が祀られている。

本殿は昭和五九年三一五日に市の文化財に指定された。また、神楽堂も昭和六一年三月一五日に市の文化財として指定された。

この生出神社の森にもムササビが生息し、都留文科大学の学生により保護観察が行なわれている。

## 八朔祭と屋台飾幕

毎年九月一日(朔日)は、生出神社の八朔祭り、下天神町、早馬町、新町、仲町、下町、高尾町と宮本である四日市場の氏子により、御輿の巡行と大名行列が行なわれる。

かつては、各町の若者たちが競って豪華な屋台幕を飾った屋台を繰り出し、その屋台の舞台で、芸者や若者たちが囃子に合わせさまざまな出し物を演じ、豊年に対する感謝と喜びを捧げた。

日暮れてあたりが暗くなると、屋台を飾る提灯に灯が入り、その灯に豪華な幕が照らされ、まるで幻想の世界にいるようであった。

近年屋台の巡行も交通事情等で姿を消し、当時の面影は飾幕でしか偲べない。

現存している飾幕は四枚で、その内早馬町の飾幕は「牧童牛背に笛を吹く」の図柄で、下絵は葛飾北斎と伝えられている。中幕は、白縮緬に黒一色の濃淡で、一五頭の馬が気がねなく左右に遊び戯れている。柳文朝筆、南柳斎の落款がある。

下町は「虎」の図柄で、金糸・黒糸のだんだらで縫いとられ、あしらった緑の竹も影がうすいほど猛々し

い獸王の姿である。虎の爪、牙は鍍銀された真鍮で、爛々たる面眼はガラスを光らしたものである。「東陽画狂人北斎筆」の落款がある。中幕は三番叟の翁の舞姿の墨絵で、波羅密とその弟子である盛里出身の岳麟の共作である。

新町は、「鹿島踊」の図柄で、鹿島神宮を現わす神域に白丁を着け、烏帽子を被った男三人が事触れしつつ囃し立てている愉快な模様である。落款はないが北斎筆と伝えられている。

仲町の飾幕は鳥文斎藤原栄之図の落款があり「桜に駒」の図柄であったが、昭和一〇年九月、崖崩れで公園の倉庫が土中に埋没する難に遭い、わずかに花びらを残したのみで刺繍のあとを残した緋ラシャの地となった。この大綴帳がもし完全に残っていたら、栄之生涯の大傑作として標記されるべきものであった。

これらの飾幕は、歳月の流れにいたみが甚だしかったため、著名な染織研究家である山辺知行氏が一〇余年にわたり自ら指導と補修にあたり、いづれも立派に復元され、市の文化財として文化会館に保存されている。表紙絵は早馬町の飾幕、「牧童牛の背に笛を吹く」である。

## 63. 保寿院

曹洞宗岩生山保寿院は、四日市場の生出神社前入り富士急行の踏切りを渡るとある。

本尊は十一面観世音菩薩で、弘治三年(一五五七)に創立された。開山は、長生寺五世明庵宗鑑和尚で、出雲大社附神宮の子として生まれ、七歳のとき仏門に入り、人と成るに及んで参禅学道に志し、高德の師に歴参し、文字のみならず、禅の道においても高名であ

った。本堂、庫裡は明治年間に焼失し、再建したものである。

### 保寿院

アツツ観音  
第二次世界大戦の昭和

一八年五月三〇日、最高統帥機関の大本営から、次の発表が行なわれた。

「アツツ島守備隊は、五月一二日以来、極めて困難なる状況下に、寡兵よ

く優勢なる敵に対し血戦を継続中の処、五月二十九日夜敵主力部隊に対し最後の鉄槌を下し、皇軍の神髓を發揮せんと決意し、力を挙げて壮烈なる攻撃を敢行せり。爾後、通信全く杜絶、全員玉碎せるものと認む。傷病者にして攻撃に参加し得ざるものは、之に先ち悉く自決せり。我が守備隊は二千数百名にして、部隊長は、陸軍大佐山崎保代なり。敵は特種優秀装備の約二万にして、五月二十八日まで与たる損害六千を下らず。」

発表の夜、大本営の陸軍報道部隊は、ラジオの放送で、山崎部隊長は、ただの一度でも一兵の増援、一発の弾丸をも要求したことがなく、死を目前に敵の装備などをくわしく報告してきたと説き、全将兵に与えた「戦陣訓」の「陣地は死すとも敵に委せることなかれ生きて虜囚の辱めを受けず」ということを全員が守ったのだと強調した。

「他に策なきにあらざるも、武人の最後をけがさんことを虞る。英魂とともに突撃せん」これが山崎部隊長の最後の電報であった。アツツ島の犠牲で、濃霧にまぎれて救出されたキスカ島五六〇〇の守備隊があったことを忘れてはならない。八日にキスカ島に米軍三万余が上陸したが全員もぬけのからであったという。キスカ島救出作戦である。



山崎大佐は、あと中将に特進された。四日市場の出身で、父は小田原市の人、保寿院一七世玄洞悟中和尚で、折目正しい人であった。県立二中（日川高校）から陸軍幼年学校にはいり、士官学校を出て中国大陸にも転職した。アツツ島には、戦死の一ヶ月前に転任したばかりだった。出発にあたり、郷里に遺髪と遺書を托したという。

この平和の礎となった勇士の遺徳を偲び、その菩提を弔うと共に、世界平和祈念のため、山崎中将出生の保寿院境内に、慈悲と平和の象徴である観世音菩薩尊像を建立し、毎年五月二九日アツツ観音奉讃会により慰霊祭が行なわれている。



アツツ観音

### 64. 清泉寺

臨済宗生山清泉寺といい、四日市場に所在し、本尊は薬師如来である。行基の作と伝えられている。寺の前にある「指月橋」は、この上で月を見ながら修業をしたと言われている。

耳をよくするといわれる地藏尊祭りが、四月二四日に催されている。



清泉寺本堂

### 65 東陽院

臨済宗日出山東陽院といい、古川渡に所在し、本尊は聖観世音菩薩である。

古川渡の国道沿にあり、明治初期まで寺小屋が設置されていた。

境内に六地藏尊及び七地藏尊がある。



東陽院本堂

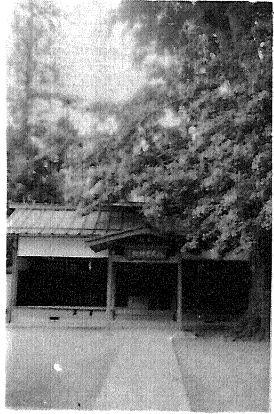
### 66. 八王子神社

国道から、川茂へ行く中程を左へ入ると神社がある。

祭神は、正哉吾勝々速日天之忍穗耳命・天津穗日命・活津彦根命・熊野椽樟日命・田心姫命・瑞津姫命・市杵嶋姫命で、祭礼は、古川渡の氏子により四月二一日、九月三日の春・秋二回行なわれている。

伝説によると、養老年間（七一七～二三）に僧行基がこの地方に来て姥沢河原から水を引いて開田することを思いつき、五男三女の神々を祀って祈願した。その後百年を経て、宝暦九年（一七五九）現在地に社殿を造営したといわれている。

境内に大榎（周囲七・二メートル）、大銀杏（周囲四・六メートル）の大樹がある。

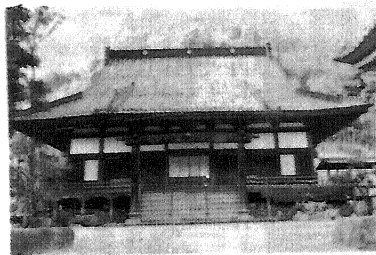


八王子神社社殿

## 67. 浄泉寺

浄土真宗川応山浄泉寺といい、川茂に所在し、本尊は阿弥陀如来で、運慶の作と伝えられている。  
養老年間（七一七〜二四）に行基が、川茂の渡し場に薬師堂を建立したのが始まりとされ、天台宗として二四代続いた。二四代目のとき蓮如上人の教えを受け転派したものである。

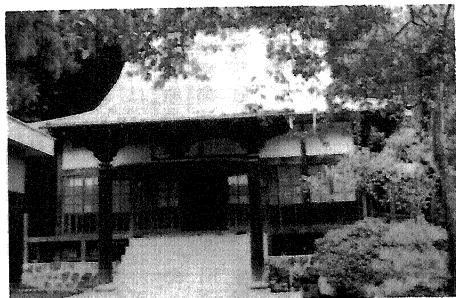
歴史的史料が数多く保存されている。  
四月二二日のお太子講「お経さんのまつり」が賑やかに行われている。



浄泉寺 本堂

## 68. 西光寺

浄土真宗常現山西光寺といい、川茂に所在し、本尊は阿弥陀如来である。はじめ天台宗であり後改宗した。西光寺の末寺として、古川渡新井に実成山阿弥陀寺があったが、慶応三年（一八六七）廃寺となった。その阿弥陀寺の本尊は木像立体（三尺五寸）、合掌地藏尊二体、三尊来迎仏等は、当寺の寺宝として保存されている。



西光寺 本堂

## 69. 二ヶ堰

小形山地区は四〇町歩の耕地がありながら水利がないため、「岡田村」といわれていた。

このため、地区民は用水の導入と開田化の協議をつ

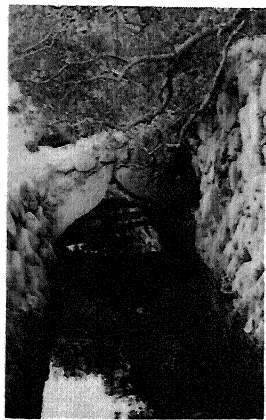


二ヶ堰

づけ、代表者に井倉村の豪農小林徳兵衛翁を依頼した。  
安永九年（一七八〇）代官所へ願っていた工事費七一  
九両が認められ、天明二年（一七八二）起工の鋤入  
れが行なわれた。

堰は、羽根子境から取入れ小形山中谷入口までの二  
六町（二八三七メートル）で、堰の三分の二以上は岩  
盤で掘削ははかどらず、資金は欠乏した。小林徳兵衛  
は私財をなげ尽くし、一六年の歳月を重ね、寛政一〇  
年（一七九八）やっと完成した。

その後、堰の取水口は、大正一二年、川茂に桂川電  
気興業会社がダムを建設した際、ダム近くに変更され  
た。  
現在も堰は、豊富な水を小形山地区に流しつづけて  
いる。



二ヶ堰にかかっていた合掌工法による橋